

KSKP えのき

NEWSLETTER

地域で当たり前に暮らすために

編集人：社会福祉法人えのき会
理事長：古川 末子
京都市伏見区桃山町山下44-8
075-605-0303 (TEL)
075-605-0310 (FAX)
e-mail:info@enokikai.or.jp
http://enokikai.or.jp

1984年8月20日第3種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6の日)発行 定価100円

残暑お見舞い申し上げます

気候変動の影響でしょうか、連日うだるような暑さと、各地の豪雨による被害に、ただ驚くばかりです。明日は我が身と思いつつ、各地の被害が映るテレビに見入ってしまいますが、皆様方にはご健勝で過ごしてはいかがでしょうか。

各地で被災されました皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

☆シ ☆シ

現「えのきニュースレター」の前身で「榎の会通信」の第1号発行が1988年10月でした。「榎の会」の活動が始まった時でした。

当時、障害のある人は、家族介護に全面的に依存して生きていくか、大人数の施設で暮らすしかなかった時代でしたが、これを疑問に感じて始めたのが、「宿泊訓練」でした。えのき会の原点です、

活動のための資金も、安心して活動できる拠点(家)も無く、行き詰ったこともありましたが、皆さまからのご支援や、「私の家を使ってください」とお電話をくださる方もあり、多くの方に支えられて、今があります。

日本は、ボランティアや寄付文化が育ちにくいとこれまで言われてきましたが、小さな活動を長年応援して下さいました。そんな皆様には活動や法人の状況を

「ニュースレターえのき」として、お送りしてきました

でしたが、ここ最近「諸事情で受領を辞退いたします」や宛先不明で戻ってくるケースも見受けられるようになりました。

長い時間の経過がさまざまなことを変えていく、変わっていくことを改めて思いました。

今日までご支援いただきました皆様の中で、「今後、送付は不要」と思われまます方はご面倒ですが、お電話か、同封してお知らせください。えのき会までご連絡いただければ幸いです。引き続きご購入くださいます方は、これからもよろしくお願い致します。

当法人としまして、重い障害の人たちの地域の暮らしを、今後も支援していきたいと思っております。ご支援、ご協力のほどお願い申し上げます。

残暑厳しき折、どうぞご自愛くださいますようお願い申し上げます。

理事長・古川末子

ご連絡先

えのき会 本部事務所

tel 075・605・0303

FAX 075・605・0310

information

社会福祉法人えのき会初代理事長西川孝氏が四月四日逝去されました。享年八十九歳でした。

30年前の無認可団体の頃、借家を転々としながら活動していた頃に、次の「借家」が見つからず困り果てている時、現在のえのき会の法人本部でもある伏見区に土地の提供を申し出ていただきました。1997年に、その土地に「えのきの家」を建設する事となり、そこが新たな活動拠点となりました。

II「重い障害があっても、地域の中心であたりまえに暮らす」II家族たちの願いを理念に掲げ活動が始まりました。その後、NPO法人格、そして社会福祉法人えのき会へとステップを踏むことが出来ました。ボランティア中心から、介護職員等の採用へシフトしていきけるようになり、障害福祉の基盤を築くことができました。故西川氏のお申し出がなければ、現在のえのき会はなかったといえます。

これまでのご厚情に深謝致しますとともに、ご冥福をお祈りいたします。今後、残された者たちで法人事業の更なる充実にむけ力をあわせて参りますので、これまでと同様、ご支援の程お願い申し上げます。

法人一同

チラシでご案内していますが、今回もフードドライブを実施したいと思っております。詳しい諸事情もありますが、一人でも多くの方のご協力をお願い致します。



この春入職したばかりの職員が、先輩職員に教えてもらいながら日々現場で奮闘しています。そのひたむきさに、周囲から「いいねー!」。また、事業所ごとに置かれた「リーダー」に、新たな責任と意欲を感じながら、それぞれの奮闘があります。しかし、そこには周囲の同僚や先輩、そして利用者さんからの静かなエールがあり、それぞれ励まされながら頑張っている職員がいます。

わぐらの家

生活介護事業所

新入職員

後藤 愛



私が福祉の道を進もうと思っ
たきっかけは母にあります。私
が幼い頃から母は障害者福祉の
現場で働いており、幼かった私
から見れば言葉として認識でき
ないような発言や手のわずかな
動きから、介護者が利用者さん
のやりたいことや、思いを掴み
手助けしたり、話をしたりして
いる姿を見て、介護職のかっこよさ、専門性に魅力を感じ福祉の仕事に興味を持ちました。

しかし、大学で実習に行き、1人の職員さんが複数の利用者さんを担当されている場面を何度も見ました。それを見た時にきつと私も将来はこんな感じで働くんだろうなと残念に思っていました。それでも利用者さんと深く関わりたいという気持ちを諦めきれず就職先を探していた時にえのき会を見つけました。えのき会に入職し、大学で学んでいた技術が生かされている部分もあります。まだまだ勉強不足な部分が多く、先輩方には助けて貰ってはかりです。」でも、この方



こんな表情されるんだ!、「もしかしてこの関わり方好きなのかも?」といった発言があり、仕事をしていたとても楽しいです。

わぐらの家 西町

生活介護事業所

新入職員

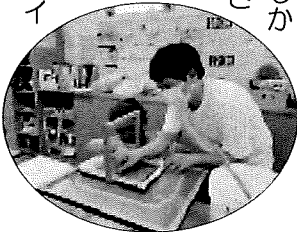
小野 誠也



初めまして新入職員の小野誠也です。えのき会に入職して4か月になりました。えのき会に日が見の連続で日々勉強中です。私が福祉の仕事を選んだ理由が、身体障害者である父親が関係しています。障害があるからこその苦労を見てきたので出来る範囲で支援してきました。その際に言われた「助かった」という言葉は私の中で、人の役に立った瞬間でもありました。いつしか、父親以外でも私の力を役に立てたいと考え福祉の仕事を選びました。

実際に働き始めると利用者様との関わり方や支援の方法で悩むことも多いです。しかし先輩職員が相談に乗ってください、分かりますと教えて頂けるので不安なく働くことが出来ます。また、利用者様も優しい方ばかりです。

新人職員である私に対してトイ



しや食事などの介助に積極的に協力して下さっています。これも一対一の支援ができる環境で関係性を深めることが出来るからだと思います。今後は多くの利用者様と関わりを持ち様々な支援にチャレンジしていきたいと思っています。

さぐらの家

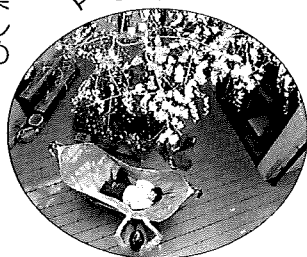
生活介護事業所

リーダー

山下 愛美



さぐらの家は入浴の支援を希望する利用者様が主となっております。毎日約3〜6名の入浴を機械浴にておこなっています。看護師との連携が取りやすく、日々の体調や身体チェックを丁寧に実施しています。入浴ではない時間はストレッチや体操などの身体を動かす取り組みや、表情を観察しながら読書、季節に合わせた創作活動などを行っています。今の体制になり1年が経ち、少しずつ活動が定着してきました。今年度は、これまであまり実施できなかった外出活動を充実させたいと思います! 最初の目標は、法人内のデイ、「榎の家」や「さぐらの家西町」に行き、交流を深めること、それぞれの事業所にある絵本を借りてくることです。そして、昨年度の夏祭りやクリスマスなどの行事で、良かった点や反省点を活かして、皆で楽しめるイベントになるように一緒に考え、準備、実行していきたいです!

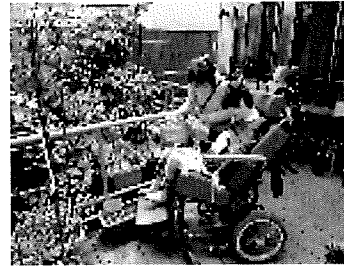


榎の家
生活介護事業所

リーダー
中澤 玲菜

榎の家では毎日15名前後の利用者さんが通所され、日中活動をとおこなっています。

今年度から、中庭テラスにある畑を使って園芸活動を再開しました。雑草を抜いて、肥料を混ぜて、ひまわりの種やトマト、トウモロコシの苗を植えて...という工程を、利用者さん、ボランティアさん、職員の皆で分担して準備しました。



最近では、利用者さん達が日々の水やりをされています。そのまま水遊びに発展したり、利用者さん自ら畑の様子を見に行かれたり、手拍子しながら「美味しなあれ♪」と野菜にパワーを送っておられたりと、それぞれの楽しみ方を見出しておられます。

また、5月からは月に2回、新たにギターのボランティアさんが榎の家に来てくださっています。「ふるさと」や「上を向いて歩こう」等を弾き語りされ、利用者さんも職員も「この曲知ってる〜!」とニコニコ。その噂を聞きつけて、さくらの家の利用者さんと職員が覗きに來たりと、皆で交流を深めるきっかけとなっています。

今後も充実した日々を送れるように、皆で楽しめる活動を提供していきたいと思っています。



ハックベリー
グループホーム

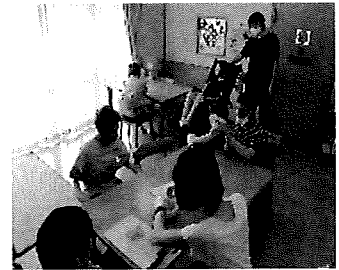
リーダー
井上 智尋

コロナ禍となり、グループホームで毎月開催していた全体外出や個人外出をする機会がなくなっていました。コロナ禍の中でも利用者の楽しみをつくるべくできたのが祝日に開催する「グッドホリデー」です。祝日のある月に企画する職員を決めてイベントを開催しています。みんなで昼食を作ったり、デザートを作ったり楽しんだり年末には1年を振り返るスライドショーを作成してみんなで鑑賞したりなど、企画する職員によって様々なイベントが実施できていて利用者さんだけでなく職員も一緒に楽しめるイベントとなっています。

また、コロナ禍がある程度落ち着いてきたら、徐々に外出の機会を持ちたいと考えています。ホーム全体での外出はまだ難しくても、個人外出や少数グループを作った外出など企画できたらと考えています。感染対策をした上で外に出る機会を増やし、面白い物が好きな女性陣はショッピング、乗り物が大好きな男性陣は電車やバス旅など様々な企画を練っているところです。再開できる日が早く来ればと願っています。普段とは違う充実した利用者さんの表情が見られるよう、楽しい企画をどんどん実施できればと考えてます。



ホームの仲間は第2の家族です(^_^)



ベル
グループホーム

リーダー
清水 光

ベルでは6名が暮らしています。ウィークデイは、各々が通所されるデイサービスへ。帰宅後は入浴する人、テレビを観る人、日中の出来事を話されたり等、自由な時間を過ごされます。あと寝る人も!笑 普段のひとこまをご紹介します。

ある利用者さんが、夕食時に大食いバラエティー番組を観ながら「僕はドクターストップがかかるまで食べられますよ!」と急な一言を発し、「エーッ」とみんなびっくり。そんなわけないとガハハハと楽しい雰囲気になりました。ご本人が本気かどうかは定かではありませんが、その場で「これはおもしろい。やってみましょう!」と伝えるとニヤリとした顔をされ、周りは「エーッ」。そこから利用者さんと職員で色々なアイデアを出して話し合いをしました。安全面から大食いは危険となり、わんこそばみたいなのはどうだろうとなりました。「わんこそばクリーム?」「わんこ唐揚げ?」「わんこ綿菓子?」「わんこプリン?」どれもしんどそうとなり、基本に戻り「わんこそば」に決定!もちろん安全が大事なのでルールはしっかりと決めます!

こんな様子で利用者さんの一言からイベントに発展していくこともあります!



先日 豆乳で湯葉を作りました



最初に、これまでえのき会でお世話になった方々に、心よりお礼申し上げます。
わが家の長男充浩が昨年の9月に42歳で亡くなりました。

そんな日が来る覚悟は、どこかではしていましたが、やはり受け入れ難かったです。
生まれて水頭症と分

かり何度も手術をし、重い障害が残りました。たつぎの人生でした。その充浩がいろいろな思いを残していつてくれました。
充浩との別れの時、職員の方から「これまで充ちゃんからいろいろな事を教えてもらいました」
「落ち込んでいる時に充ちゃんの笑顔をみると元気が貰えました」と言ってもらえたことは、とても有難かったです。
他人から世話になるだけでなく、生きてい

♪ お世話になりました ♪ 清水千賀子



る間にいろんな事を教えてくれていたと改めて思わせてくれました。生きていく間に何を残せるか、どれだけ人の心に思い出を残せるか、自分自身はどうかを考えました。小さい事でクヨクヨしている私が恥ずかしくなりました。

重い障害があっても一生懸命生きていく姿を見せてくれた事に「ありがとう」って伝えたいです。

これから先もいろんな事が起こると思いますが子どもが教えてくれた誰かの思い出の中に残れる人生を送りたいと思っています。

えのき会の皆様、本当に長い間ありがとうございました。
えのき会 前理事 清水千賀子

人権とは、権利擁護とはそもそもどういう事なのか？という岸本先生の問いかけから、研修が始まりました。テーマは「最近、仕事の中で感じること」、「私の中のヒヤリハット・不適切だったかもしれない支援」、「私の中のニヤリハット・私が経験した素敵な瞬間」でした。

ニヤリハットのエピソードを少しご紹介！
「初めて私の介助で食事を食べてくれた時、その美味しそくに食べる表情を見たとき、嬉しくなりました。」
「送迎時にしか会わないのに、私の顔を見るところでこり笑ってくれる」など。

介護の現場は時間に追われ、なかなかほっこりとする時間が持てないこともありますが、



「権利擁護・虐待防止の研修を受けて」
岸本栄嗣氏 / 理事/京都芸術大学芸術教養センター准教授

職員同士、ニヤリハットに気づき語り合う事で、利用者さんのいつもと違う一面に触れ、新しい気づきに繋がることもあるかと思えます。
重い障害があっても、小さな変化に気づき寄り添う事で、よりその人らしい人生を送れるのではないのでしょうか。
何でも語り合える風通しの良い職場を目指したいと思えました。

岸本先生、ありがとうございました。
(秋山智子)



奨明賞受賞 おめでとう!!

グループホーム「ハックベリー」所属の相根菜摘美さんが、奨明賞を受賞しました。奨明賞とは、北川明氏(社会福祉法人桂の泉創業者・元京都市議)により、障害者福祉の仕事にやりがいを感じ、職場に定着してほしいという願いで新設されたもの。相根さんは「原動力となっている利用者さんの笑顔がたくさん見られるよう一層頑張りたい」と喜びを語ってくれました。
京都新聞 3・23付朝刊

後記にかえて

今年4月、国連障害者の権利委員会は、270万人いるとされるウクライナの障害者の大半が安否不明だとの声明を発表。多くの障害者が支援網から切り離され、薬や酸素、食料、水が不足し、医療設備などを利用できない状態で自宅や施設に取り残されていると報告している。

「日本でも社会保障の財源がないから、ある程度、命の選別は仕方ない。という空気がバブル以降ぐらいいからより濃厚になってきたと思います。今も生産性が高いこと、より多くの利益を生み出すことが人間の価値とされ、それを基準に人が選別される世の中になっていきます。そこに戦争が起きたら一段と地獄が深まることに作家、活動家の雨宮処凛さん」
(NHKハートネットから)

自ら声をあげることのできない障害のある人、子どもや女性、いわゆる弱者と呼ばれる人が多数います。
ロシアのウクライナ侵攻をきっかけに、日本においても戦争を声高に語る人たちがいます。自らは前線に赴くことはなく、泣くのはいつも市井の人、そして弱者。

日本でも戦争のなかった77年間、これからも戦争で命を落とす時代が来ることのないように！
一人ひとり かけがえない命です。
(f)

□ 発行人・関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町2-2
東興ビル4F



□ 編集人：(福)えのき会 理事長 古川末子
(法人本部)
〒612-8002
京都市伏見区桃山町山下4-4-8



1984年8月20日第3種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6の日)発行 定価100円